当たり前の人

智辯学園中学校　２年　中前　裕貴

小学６年生の夏、僕たち家族に信じられないことが起きました。それは、お父さんの死です。始めは信じられなくて何が起こったのかも分かりませんでした。お父さんは持病を抱えていたわけではなく、ちょっとした事故で亡くなってしまいました。

僕のお父さんは、とても優しい人でした。ただ甘いのではなく、僕が悪いことをしたらしっかり叱ってくれて、悩んでいることがあればすぐに相談にのってくれました。とてもいい父でした。それなのにあんなことが起こってしまったので、もう二度と話すことができなくなりました。あんなことが起こるなんて予想もしていなかった僕は、お父さんに怒られてお父さんのことが嫌になったこともあります。今では、どんなに嫌になっていたとしても会うことができません。そう思うと、とても悲しいです。

僕は毎日学校であったことをお父さんに話していて、こんなことで困っていると言ったら絶対に何かアドバイスをくれました。僕はそのアドバイスのおかげで壁にぶつかりかけた時も乗り越えられました。

僕は、お父さんが亡くなる直前に、お父さんと約束をしていました。その約束とは、小学校の陸上記録会の800メートル走で３分を切るというものです。僕は運動が苦手で正直無理だなと思っていました。ところが、小学校での陸上記録会の練習が始まる前にお父さんは亡くなってしまったので、僕は絶対に３分を切ろうと決意して、家でも学校でも練習をしていました。本番の日。僕は初めに全力で走りすぎてしまって後半まで体力が持たず、結果は３分８秒でした。小学校の先生にアドバイスはもらえたものの、お父さんと一緒に練習できなかったのは悲しかったです。もしお父さんと練習できていたら約束は守れたかも知れません。それに、３分切れなかったことも、この結果をお父さんに直接伝えることもできないことも、とても悔しくて悔しくて、泣きたかったです。

大切なものは、失ってからそれが大事だと気づくことができるかもしれません。僕にとってのお父さんもそうでした。こんなことが起きるとは考えもしていませんでした。普段は当たり前だと思って関わっている人に、いつどんなことが起こるのか分かりません。今、僕たちにできるのは、その当たり前のようにそばにいる人を、とても大切にすることです。喧嘩しても、仲直りしないと、きっといつか後悔します。いて当たり前と思っていますが、当たり前でなくなることもあるのです。家族がいるということはとても幸せなことなのです。家族みんなでごはんを食べたり、家族みんなで旅行に行ったりと、楽しいことがいっぱいあります。もちろん嫌なことだっていっぱいあります。それが当たり前なのです。当たり前の人というのは、普通に話して、普通にごはんを食べて、普通に遊んだりする相手なのです。

今、僕にできることは、当たり前のようにそばにいる人をとことん大切にすることだと思います。

僕は、お父さんが亡くなってから、あることを決めました。それは将来の夢です。僕のお父さんは小学校の先生でした。とても優しくて良い先生だったそうです。だから僕もお父さんみたいな立派な先生になりたいと思いました。先生の仕事はとても大変だと聞きますがそれでも僕は先生になりたいのです。いつでも悩みを聞いてくれたり、分からないところを教えてあげたりと色々なことをしてお父さんみたいな先生になりたいです。

僕のお父さんは家族みんなに優しくしてくれたので、僕にも家族ができたら、お父さんのような父になりたいです。